

法然上人讃仰会

2010

monthly
JODO

October

10

一
下
世
古
我

法然上人

54

プレゼント

私は 交通事故にあつた

今 治療中

私は 神様から

生きるって 切符を 貰ったんだよ。

くれる時

「あんたは 今 死ぬ人じゃない。

あんたを 愛してる人たちのためでも あるんだよ。

生きるって事がね」って

嬉しかった

私は まだ 死ぬ人じゃないんだって 思った

表紙の人と書

北村宗介・書家

『浄土』2010年表紙の

1958年静岡県生まれ。北海道大学卒業。書詩家木村三山に師事、書、篆刻を学ぶ。
 宮部みゆき著『孤宿の人』、火坂雅志著『軍師の門』、第140回直木賞受賞山本兼一
 『利休にたずねよ』等、題字揮毫多数。
 筆一本書法ライブ「辻書法」を各地で公演。

10月の書

いっしんぷらん

一心不乱

心は平安そのもの

臨終、命終わるときにのぞんだときに、
 七日の間、心が乱れることなく、お念仏
 を忘れなければ、必ず阿弥様が迎えに
 来てくれると、説かれています。お念
 仏は私たちの心を平安にしてくれます。

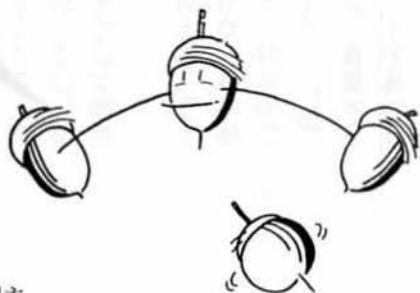
(編集部)

浄土

2010/10月号 目次

NHK『こころの時代』を終えいま法然上人に思う …町田宗鳳	2
いのちの授業③ ……対本宗訓	12
会いたい人 横内謙介さん② ……関 容子	18
法然上人をめぐる人々⑤ ……石丸晶子	26
響流十方 ……林田康順	34
連載小説 渡辺海旭 ……前田和男	38
Jフォーラム ……	47
浄土誌上句会 ……選者＝増田河郎子	48
マンガ さっちゃんはネッ ……かまちよしろう	50
編集後記 ……	52

表紙裏 茜の詩 ……新納 茜
背表紙裏 教えと法話 ……生野善應



表紙題字＝中村康隆前浄土門主
 アートディレクション＝近藤十四郎
 協力＝迦陵頻伽舎

【法然上人鑽仰会●講演会】平成二十二年六月二十五日

NHK『こころの時代』を終え、

いま

第一回

法然上人 に思う

町田宗鳳

私は決して仏教学者でもなく、法然研究の専門家でもありません。私の専門は、比較宗教学といって、仏教のみならず、キリスト教、ユダヤ教、イスラム教、あるいは、世界の民族宗教、そういうものを比較する学問に携わっている人間です。

私は、若いときは禪寺におりました。京都の臨済宗の大徳寺に、まるまる二十年過ごした人間です。ですから、本来は余りお念仏とも縁がなく、ましてや法然さん、親鸞さんとも宗旨が違います。なぜこのように法然さまと縁ができたかと申しますと、一つは、私はお寺の子ではなく、十四歳で家を出て、自分でお寺に飛び込んだ人間です。修行が二十年ぐらいたったとき、臨済宗の修行のやり方だけではもう一つ心が満たされないものがあり、密かにお念仏をしていました。心の中で、坐禪をしながら、お念仏を称える、そういう気持ちになっていたわけです。

と同時に、若いときに非常にあこがれていました鈴木大拙^{すずき だいてつ}さんという禪学者として高名な方ですが、先生自身が、浄土に対して非常に興味を持っておられた方でした。また、私が尊敬する哲学者の西田幾多郎^{さいでん きたろう}さんも、お母様が熱心な念仏信者だったということで、西田哲学にはお念仏の味がしみているように思います。ですから、もともと少しは学問的に浄土門に関心があったのです。

そしてアメリカに渡りまして、六年間学生生活を送りました。その後さらに長く、教師になって、二十年近く海外で過ごしたわけです。学生としては、三年間が修士号、あとの三年間が博士号の勉強をしていたわけですが、いざ博士論文を書く段になりまして、さて、誰をテーマに取り上げたらいいかということ考えたのです。

そこで、西洋の学問を受けていたのだから、キリスト教の思想家なんかを選んでよかったのですけれども、やはり日本人として、日本の思想家を取り上げたいと思いました。

アメリカの仏教学界では、親鸞、道元、日蓮、このお三方は非常に人気が高く、それぞれの思想を専門的に研究している学者がたくさんいました。法然さんを研究しているという人が、アメリカ人の仏教学者にはちっともないのです。だけど私から見たら、日本の思想史の中で法然さんは決して無視できない大きな存在でした。何か多くの方の話を聞いていると、法然さんのことを親鸞さんが現れる前の露払いみたいなことを言うわけです。私は絶対にそんなことはない、法然さんの方が深いのではないかと思っていました。教義を体系づけるという意味では親鸞さんの功績があるわけですが、信仰の世界、あるいは体験の世界においては、法然さんの方が、はるかに深いものをお持ちではないか、そういうふうな考えておりました。

また、アメリカの学者だけではなく、日本のインテリもよく法然さんは不徹底であるといったようなことを口にするのです。往生には戒律も要らないと言いながら、ご自身は親鸞聖人のように肉食妻帯されたわけでもない。しかしそれはちよつと理解が浅いのではないかと思っていました。そこで、私のはっきりと法然という人がどういう人であるか、英語で議論してみようと思いました。

それは、浄土宗の宗祖としての法然さんとか、お念仏を普及させた法然さんとか、そういう意味で私はとらえていたわけではなく、大きな思想史の中で果たされた役割、あるいは、キリスト教神学とか、世界の神秘体験を持つ宗教者と対比しても、法然さんはまことに深いお方だし、ぜひ法然上人をテーマにして博士論文を書こうと腹を決めたわけです。

私は法然さんを研究テーマに選んで、とつてもよかったと思っています。私の英語の博士論文も、すぐにカリフォルニア大学の出版局からとつても立派な本として出していただきましたし、その後、日本に戻って、法蔵館から『法然』、さらに、講談社から『法然対

明恵」とか、法然さんにちなんだ本を何冊か書く機会も与えられて、非常にありがたいと思っています。

ただ、先ほど申しましたように、私は法然研究の専門家ではありません。私よりはるかに浄土宗のお坊さんで教学に詳しい方がおられる中で、たまたまNHK教育テレビが、「この時代の時代」で法然を取り上げるということになったとき、私のほうに依頼が来て本当に驚いたのです。でも、せっかくの機会だから、私の目いっぱいところで話させてください、単なる知識としての法然さんではなく、もし法然さんがこの二十一世紀に生きておられたら、現代の日本人にどういうふうに話しかけられるだろう、そういうお気持ちに沿いたいという一心で、十二回にわたって話したわけです。

昔のように、一念十念のお念仏をしたら極楽往生できます、この世のことはともかく、亡くなったら間違いないくお浄土に行けます。そういうような説き方をしても、現代人のハートはつかめないと思うのです。

大体、あの世があるのかどうかともわからん。来世というものがあるのかどうか、科学では証明できないとか、そういうことを言う人もいます。素直に南無阿弥陀仏と六字の名号を称えられる方もいたら、いや、念仏なんかしたら地獄に落ちる、題目じゃなきゃだめだと思っている人もいるわけです。あるいは、念仏とか題目とか、一切関心がないという人がほとんどです。一生に一度だってお念仏を称えたことがない人のほうが多いわけです。そういう人を相手に、もし法然さんがこの平成の日本に現れたら、何をお話しされるだろうかと思ったのです。

現代の日本は悲しいことに、大変多くの方がうつ病になったり、ひきこもりになったり、あるいは、家庭内暴力を振るったり、そして、残念なことですけれども、毎年、三万何千

人の人が自殺をしている。世界でこれほど恵まれた国はないのに、随分多くの方がみずから命を絶つておられます。三万人の人が自殺しているということは、自殺未遂は十万人以上いるわけです。これは悲しくも、異常な状況です。

そういう社会状況を前に、今、法然さんがトコトコと現れてこられたら、どうお話しされるだろうということを常に考えていました。

私は、よく知恩院のご靈廟れいどうぼ、法然さまのお墓が勢至堂の上にございますけれども、あそこにはしばしば足を運んで、お念仏を二十分、三十分と称えていました。それはもう、学者として知識を披瀝するというよりも、法然さんのみ心を感じたいという一心で知恩院に再三足を運んで、ともかく、私を通じてお話しください、私はもう道具になって、パイプになって話しますから、どうぞ法然さんが渋谷のスタジオに来てお話しください。そういう祈りを持っていたわけです。私は法然さんの文楽の人形みたいになって、法然さんに操っていただこう、そういう気持ちで臨んだのです。

「太陽の男」 法然さん

私は今放送を終え、大変大きな挑戦ですが、小説『法然の涙』（講談社、二〇一〇年一〇月末刊行予定）を書いております。そして原稿用紙で六〇〇枚、ほぼ書き終わっています。

五木さんの小説『親鸞』に描かれている法然観にも、もう一つ納得できないでいます。ちよっとドロドロし過ぎていると思っています。大変な時代に生きておられたわけだけども、法然さんって本当に、明るい方だったと思います。だから、あれだけ多くの人が集まってきたのです。決して暗い人ではなかったのです。そして、迷いもなかった。口称念

仏が身についてからは、迷いというものから離れられたはずです。

もちろん、叡山で修行している十八歳前後なんて、本当に絶望的で、それこそ死にたいと思うぐらい悩んでおられたと思うのですが、私は黒谷に二十五年お過ごしになって、四十歳前あたりからもう、しっかりとお念仏に安心立命しておられたと思います。一切こだわりのない境地に入っておられたと思います。

比叡山の黒谷、大変深い谷ですが、青龍寺にも私は再々行きました。法然さんが二十五年間を過ごされ、ご自身を決定的につくった場所ですから、どういう場所であるかということを知るために、何度も足を運んだのです。それで思ったことは、今は黒谷というくらい陰気な谷です。黒谷の黒は大黒さんをお祀りしていたからつけた言葉だそうですが、黒い谷です。杉に囲まれて、余り陽は差さない。けれどもそうではない、針葉樹林は戦後の植林政策でやったことであって、本来は広葉樹林の山です。秋になれば葉っぱが落ちて、そんな高い木もなくて、あそこは本来とっても明るい谷だと思うのです。

しかも、何度もあの辺をぐるぐる歩き回ってみると、ちょっと外れたあたりに高台があり、すごく眺望がいいのです。針葉樹林の木がないことを想定してみると、京都の盆地が見渡せて、しかも西山に太陽が沈んでいく、毎日、阿弥陀如来が西の山に沈んでいくように、真っ赤な太陽を拝んでおられたのです。それを二十五年間も続けておられたわけだから、当然、お浄土のありがたさというのが体の隅々までしみわたっていたと思います。そこで学問を積み、毎日のように何万遍もお念仏を称えておられたわけですから、私は、法然さんの思想というのは、夕日に育まれたと思っています。

山越阿弥陀図とか、そういうのがございますけど、あるいは二祖対面のお話とか、いろいろございますけれども、ちゃんと肉眼で夕日を毎日のように眺めておられたと思うので

す。そこから出てきたイメージです。

大体、私は、法然さんを「太陽の男」と思っています。何故かという、岡山の誕生寺、あそこも結構、眺めのいいところです。美作みまさかの非常に穏やかな風土の丘陵地帯でし、法然さんの生家である漆間家の屋敷は、今の誕生寺の場所ではなしに、ちよつと高台の日当たりのよい場所にあったようです。それから以降の人生においても、法然さんというのは、常に一貫して山の中腹の、日当たりのいいところに暮らしておられました。

九歳でお父さんを殺されて、預けられた菩提寺、那岐山なきさんのふもとにありますけれども、菩提寺にも足を運んでみたら、山の中腹でした。これも南面していますから、毎日、朝から夕まで太陽が当たる場所です。

そして、比叡山ひえいさんに上がってこられて、皇円こうえんという人について学問を積むわけけれども、皇円さんのおられた功德院というのは、比叡山の東の斜面にあつて、下はもう琵琶湖が一望に見渡せる、非常に眺めがよい、日当たりのよい場所で、また太陽に遭遇しておられます。

そこから十八歳で嫌になつて、黒谷に潜むのだけれども、今度は、東の太陽じゃなしに、朝日ではなしに、夕日をずっと見続けるわけです。

そして、四十三歳で山を下りられ、西山広谷に行かれます。今の粟生あおう光明寺のある辺ですけれども、あそこも東向きですから、日当たりがいいのです。そして、また東山の吉水とか大谷に庵を構えられるわけけれども、今度はまた、京の西山を見て、夕日を見るわけです。このように一貫して、山の中腹に庵を構えておられます。

それで、今度は七十歳になると、建永の法難で、四国に流される。これは弟子が処刑されて大変なことがあったわけですが、いけば法然さんの修学旅行です。楽しかった

と思います。だって、十三歳のとき美作から吉井川という川を下ってずっと西大寺の辺に出てきて、瀬戸内海行路で難波まで行って、淀川を上ってやっと比叡山に上られたわけです。今度は、京都から西大寺までは全くそれと反対のコースを流されて行ったわけです。

そこから讃岐のほうに行かれたのですけれども、備前の山々を眺められて、それは懐かしかったと思います。ふるさとお帰りにならなかった事情はちゃんとあると思うのですが、遊女に会った室津の港あたりから瀬戸内海を横切って、塩飽島しきくじまにお着きになる。ここは瀬戸内海のパワイです。とっても気持ちのいい島です。

二月に配流が始まったと思いますが、底冷えのする京都盆地から、一月ぐらいかけて瀬戸内海の塩飽島に来てみたら、太陽がさんと降り注いでいて、すごく癒されたと思います。島の人たちは、法然さんを慕って、毎日押しかけてきたはずだし、随分お年を召して、体も弱っておられたと思うけれども、瀬戸内海の潮風に当たって、本当にほっこりされたのではないかと思います。今行ってみても、塩飽島ってほっこりする、気候温暖な島です。何よりもの息抜きになったのではないかなと思うんです。

塩飽島から丸亀に渡って、ずっと善通寺辺りに行かれて、そこでしばらく滞在されるわけですが、法然さまにとつては、四国配流というのは本当によかったと思うのです。都では会わなかったいろんな立場の人に遭遇して、そこでお念仏のお話をされたわけですから、そういう意味でも、自分の教えがいろんな人に伝わっていく手ごたえを感じておられたのではないかと思うのです。

瀬戸内海の、常に太陽をさんさんと浴びるような気候風土の中で、法然さんは専修念仏をお説きになったのです。一年ぐらいい配流が許され、箕面みのおの勝尾寺にお戻りになるのですが、勝尾寺もまた日当たりがいいんです。

しかも勝尾寺というのは、熊谷直実蓮生房れんせいぼうがつくったらしいのですが、絶景です。こつちを見れば難波の街がずっと摂津の海まで広がっているのが見えます。こちらを見れば比叡山も見えるし、京都の盆地も全部見える、最高の場所にあります。勝尾寺というのは、常に太陽は朝日からずっと、ひよっとしたら夕日まで見えたかもしれない。すごく眺望のいいところですよ。あそこで最晩年、お亡くなりになる直前までお過ごしになっています。ですから、私は、法然さんを「太陽の男」と言っているのです。しかも、太陽のおかげか、根本的に楽天的で、愛情が深い、明るい宗教家になられたのです。

(つづく)

プロフィール

町田宗鳳（まちだ・そうほう） 広島大学大学院教授

1950年、京都市生まれ。14歳で出家。20年間、京都・臨濟宗大徳寺で修行。34歳のとき寺を離れ、渡米。ハーバード大学神学部で神学修士号。ペンシルベニア大学東洋学部で博士号取得。1990年から、プリンストン大学東洋学部助教授、国立シンガポール大学日本研究学科准教授、東京外国語大学教授を経て、現職。同大学環境平和学プロジェクト研究センター所長。研究分野は、比較宗教学、比較文明論。

著書は、『愚者の智慧』（講談社）、「人間は「宗教」に勝てるか」（NHK出版、ほか多数。座談会「風の集い」・「健康断食」を全国各地で開催。



●出版予告●

町田宗鳳著
『法然の涙』

(講談社 定価1900円(税別) 10月末日発売) 本文400ページ

宗教の本質というのは、学問的な研究書では、とうてい描き切れない。なぜなら歴史的文献に記されていないことを憶測してしまつては、科学的研究として成立しないからだ。

そもそも宗教とは、人間の想像力の所産に過ぎない。だから、その核心を掴み取れば、同じ生身をもつ人間として想像力を駆使していくよりほかない。となれば、フィクションこそが宗教の核心に迫る最良の表現手段ということになる。

今まで私は、13世紀という乱世に生きた宗教家・法然の思想を客観分析し、それを思想史上に位置づけることに、比較宗教学者としての使命を感じてきた。しかしいつからか、法然という一人の男の中に飛び込んで、彼の眼から世界を見渡してみたいという衝動に駆られるようになった。そういう思いで書き下ろしたのが、小説『法然の涙』である。なぜ涙なのか。それは、過酷な人生が人間の眼から絞り出す血の涙と、その苛酷さを生き抜いた先に見えてくる仏の光が人間の眼に溢れさせる歓喜の涙の双方を描きたかったからである。

(著者)

いのちの授業

③ 周死期学への展望

僧医 対本宗訓

僧医 対本宗訓 (つしもと そうくん)

1954年 愛媛県に生まれる
1979年 京都大学文学部哲学科卒業
京都嵯峨天龍寺僧堂にて修行
臨済宗天龍寺派前管長平田精
耕老師に嗣法 室號は岫雲軒
1993年 臨済宗佛通寺派管長就任
2000年 帝京大学医学部入学 同年佛
通寺派管長辞任
2006年 帝京大学医学部卒業
現在 内科医・僧医として活動中

著書

「坐禅（いま・ここ・自分）を生きる」
春秋社 1999年
「禅僧が医師をめざす理由」
春秋社 2001年
「僧医として生きる」
春秋社 2008年
「禅の逆襲（対談）」
春秋社
「〈枯れて死ぬ仕組み〉を知れば心穏やかに生きられる」
河出書房新社 2010年
ホームページは<http://www.sokun.net/>

対本宗訓師の新刊発売中！
「枯れて死ぬ仕組み」を知れば心穏やかに生きられる！

「枯れて死ぬ仕組み」
を知れば
心穏やかに生きられる

やみくもに死を恐れる、いい人生を送る方法

僧医 対本宗訓

医師にして僧である
著者が説く「いのち」の
輝かせ方と閉じ方！

今月の新刊 KAWADE夢新書



私はこの春に『枯れて死ぬ仕組み』を知れば心穏やかに生きられる」という本を出しました。書名は出版社の方々がつけてくださったのですが、たとえタイトルは長くても、内容は一晩で読みきつてしまえるような手ごろな分量となっていました。病床の患者さんにもぜひ手にとっていただきたいとの願いから、あえてコンパクトな新書サイズを選びました。

この本の中で私がお伝えしたいことは、死とはいのちのプロセスであり、私たちが畏怖しているほど苦痛に満ちた経験ではないのではないかとというメッセージです。そのためにまずは死から目をそらすことなく、死をグッと直視してみましようと呼びかけています。

私はかつて研修医時代に何度も出産に立ち会い、人体には絶妙な「生まれ出る仕組み」がそなわっていることを驚きをもって知りました。また内科医として患者さんの死に立ち会うなかで、私たちには誰しも「死にゆく仕組み」が用意されているのではないかと考えるようになったのです。

昔から高僧は自らの死期をあらかじめ知り、飲食を遠ざけて枯れるように安楽に亡くなっていました。現代を生きる私たちもまた、この末期自在な旅立ちの智慧に学ぶことができます。高僧はまさにこの「死にゆく仕組み」を無意識のうちに実践しているからです。

私は緩和医療の現場をも踏まえて、私たちの体にどんな「死にゆく仕組み」がそなわっているのか、そのいくつかをご紹介します。そのうえで、一日一日のいのちを心穏やかにせいいっぱい生きることの大切さをお話してこの本

を締めくくったのです。

自著の宣伝になるようで恐縮ですが、今まで誰も説いてこなかった死の仕組みを真正面からテーマとして取り上げました。まだまだ試論の域を出ませんが、よろしければ皆様にもぜひご一読をお願いいたします。

さて臨床で死を迎える人々に寄り添っていますと、いろいろなことを教えられます。たとえば、旅立ちが近づいた患者さんの多くは、意識がこちらの世界とむこうの世界を行ったり来たりするようになります。「えっ、そんな？」と思われるかもしれませんが、これはウソではありません。もちろん、他人の意識の内実は直接にはわかりませんので、うんと厳密に言うならば、むこうの世界とこちらの世界を行ったり来たりしているように見える、ということです。そうすると皆様は、「なあんだ、そのように見えるだけか」とおっしゃるでしょう。しかし、その「の、よ、う、に、見、え、る」というところが仏教者としては大事な手がかりだと思っています。

私は医師となつて実際に何人もの患者さんの死に立ち会うにつれ、臨死の患者さんのまなざしが、坐禪をして禪定に入つた僧のまなざしと非常に似ていることに気づくようになりました。つまり仏像に見られるような仏様の目になっているのです。仏様の目とはどんな目でしょうか。一般的には慈悲のまなざし、智慧のまなざしなどと言われますが、別の言い方をすれば心の内面を見るまなざし、見えない世界を見るまなざしです。

たいていの患者さんが、いよいよ旅立ちという段階が近づきますと、この仏様の目になっていくことはたいへん印象的で示唆的だと思います。

つまりベッドサイドに寄り添う家族の人たちや、医師や看護師などの医療者の目には何も見えなくても、死にゆく患者さんの目には見えている世界があるのです。

ある人は先に亡くなった親しい人の姿を見えています。またある人はやさしく包み込むような光の存在に見とれています。またある人はまるで赤子が新奇な世界をいぶかしげに眺めるかのようなそぶりを見せることがあります。これらはいずれも、意識のフォーカスがこれから赴くこの世界にシフトした時にあらわれる現象です。米国ではNDA (Nearing-Death Awareness: 臨死意識) やDeath-Bed Vision (死の床で見えるもの) などと言われ、ホスピス等の終末期医療の場ではすでに広く知られるところとなっています。

たいていの患者さんは何もおっしゃらないのですが、中には「おじいちゃん(亡夫) が来てくれた」とか「お母さんがここにきてそこに立ってる」とか、実際に見えているものを語ってくれる患者さんもおられます。

このような現象を幻覚と解釈する人も多いです。確かに末期になりますと体液のバランスが崩れたり、換気の低下で低酸素の状態になったり、あるいは肝臓や腎臓のはたらきが機能不全を起したりして、医学用語でいう譫妄や不穏と呼ばれる精神症状をきたす場合が少なくありません。あらぬことを口走ったり、暴れてみたり、時には怯えや怒りなどが交錯した混乱の表情を見せること

もあります。

これに対して、今話題としているNDAのほうは明らかに様子が違います。一般的に顔の表情も穏やかで、全体的には平静さにつつまれています。多少の混乱は見られるかもしれませんが、それはせいぜいのところ戸惑いが基調であるように見受けられます。

しかもNDAは死が押し迫った時期のみに現れるとはかぎりません。時には死の数日前であったり数週間前のこともあると言われています。ということは、NDAは臨死期特有の現象であると同時に、もう少し時間的に幅のある旅立ちの準備期の現象とも理解することができそうです。

海辺で見えていますと、潮が寄せたり引いたりしながらしだいに干潮になっていくように、死にゆく人の意識もむこうの世界へ往ったりまたこちら側へ戻ったりしながら、やがて最終的にはむこうの世界へと旅立っていくのでしょうか。

皆さまは仏画の「聖聚来迎図^{しょうじゅらいいうず}」をご存知のことと思います。阿彌陀佛が五色

の雲に乗り、菩薩衆や天人天女を従えて降りてきます。阿彌陀さまから病室で死の床にある患者さんへ一筋の光が伸びて、その光に乗ってお浄土へ引接^{いんげつ}されるという如来の本願をあらわしたこのモチーフはたいへんよく描かれたようです。

実はこの「来迎」ということは「死にゆく仕組み」の一つであると私は理解



聖聚来迎図
(知恩院蔵)

しています。すなわち、物質としての肉体をまとったこちら側の世界から、次なるステップへと旅立つにあたり、スムーズな移行を助けるために、先にむこうの世界にいった親しい存在が姿を現す。それは必ずしも仏様やイエス様のようないびつな方々でなくてもいいのです。むしろ魂の近い父親かもしれないし、母親かもしれないし、あるいは先立った伴侶かもしれません。

身体レベルでの「死にゆく仕組み」については、冒頭に掲げた拙著でそのいくつかを解説しましたが、心や魂のレベルでも相応の仕組みが用意されているはずです。死にゆく人の魂を迎え取るためベッドサイドに姿を現す親しい存在があることを、昔の人は経験的に知って「来迎図」というかたちで具象化したのではないかと私は推測していますし、また米国のホスピス関係者が言うND Aと同じ現象であるとも考えています。

死についてはまだまだわからないことがいっぱいです。人はどうやって死んでいくのでしょうか。死の過程において心身に何が起こっているのでしょうか。人は死んだらどうなるのでしょうか。このような率直な問いは誰しも心のうちに秘めているものですが、残念ながら正面からの取り組みは未だなされていないように思います。これらのテーマを臨床のレベルで臨死者の視線から検討していこうという「周死期学」の樹立を私は提唱しています。ホームページなどで情報を発信していきますので、一人でも多くの方々に関心をもっていただき、プロジェクトに参加していただけることを期待しています。

(丁)

連 載

会いたい人 関 容子

横内謙介

さん

②



横内さん二十五歳（昭和六十一年）のときの作品に『夜曲―放火魔ツトム』の優しい夜―がある。この若者芝居が天下の新宿紀伊国屋ホールで三日間の公演を持てた、というのは普通考えられないことだ。言わばこれが強運のつき始め。

「なんで紀伊国屋が取れたかと言え、つかこうへいさんで予定していた芝居ができないことになって急に空いちやって、何日間か若手を入れてみようというんで声をかけてくれたんです。それでお客さん入れるのにずいぶんあちこち回りました。当時は『ひあ』さえ冷たかったですからね、まだ早い、って。ぼくが新聞社、岡森が雑誌社を回って宣伝を頼んでみるんですが、岡森は例のつかい声でいきなり、すみませ〜ん、って角川書店へ入って行って、でも、待ってろ、と言われて、今は幻冬舎社長の見城徹さんが話を聞いてくれた。見城さんはつかさんに小説書くことをすすめて、その『蒲田行進曲』が直木賞受賞

（昭和五十六年）につながるとすからね。で、わかった、って、いくつかの雑誌に声かけてくれたし、公演も観に来てくれました」
『夜曲』は、廃墟の町の中にある幼稚園に放火魔のツトム（六角精児）が火をつけて、焼き甲斐があると喜んでいて、その焼け跡に武士（岡森諱）が現れて、千年前に封印された物語が甦る、といった芝居。

「放火魔の少年と武士が仲よくなつて語り合う、というとSFのようでもあるし、ぼくの中では、死者の霊が通りすがりの者に語りかける夢幻能の世界ですね。再演のときは勘三郎（当時勘九郎）さんも観に来てくれて、この作品が二年後の『きらら浮世伝』につながる一因にもなるんですね。その縁で、岡森は角川でバイトさせてもらって、山田詠美さんとか安部譲二さんの原稿取り。安部さんにはなぐられそうになったことがあるそうですけどね（笑）」

やがて、少年時代からあこがれたつかこう



劇団旗揚げの頃の一枚。前列中央が横内さん。

へいと出会うチャンスが巡ってくる。

「帝国ホテルのロビーで、見城さんと岡森とぼくが待つてたら、あそこにはちよつとカーブになった広い階段があるじゃないですか。そこからつかさんがさつそうと降りて来たんです。今思えばわざわざ二階へ回つて降りて来たんじゃないかと思うくらい（笑）、芝居がかつた登場でしたね。岡森はつかさんに可愛がられてのちに『熱海殺人事件』の主役もやらせてもらつたし、ぼくは結婚式にも出てもらつて、岸田国土戯曲賞のときもお世話になりました」

横内さんの代表作の一つ、『きらら浮世伝』の脚本家として大抜擢されるについては、演出家河合義隆との実にドラマチックな場面がある。河合はテレビドラマ『幕末青春グラフィティ・坂本龍馬』（武田鉄矢主演）に全編ビートルズの曲を使う斬新な演出で注目され、続いて『福沢諭吉』で主演した勘九郎と

意気投合して、次はいよいよ舞台で青春群像劇を作ろうと意気こんでいた。

「最初はほかの脚本家で仕事を進めていて、それが河合さんの氣に入らずに、もう誰でもいいからやる氣と暇のある若い奴を連れてこい、となつたそうなんです。ぼくは劇団を旗揚げして六年目。小劇場の世界では多少知られ始めてましたけど、メジャーな場から声をかけられて、おっかなびっくり出向きました。下北沢の居酒屋の奥。隠し部屋のような小上がりに河合さんと劇場の制作の人が来てて、河合さんがいきなりこう切り出したんです。君、天才？ そうじゃなければ帰つて。並の人と組むと、ぼくの才能が死ぬから、つて。漫画みたいですよ。河合さんはぼくより一回り以上年上の団塊の世代で、演劇の世界で言えばアングラ世代ですけど、彼らは後輩たちに対してみんな意地悪で喧嘩腰でした。お互いになぐり合うか自慢し合うかしないと次の会話がでてこない。それくらい人づきあい

がへたな人たちなんです。河合さんはものすごい自信をみせて強気な一方、内心は何かにおびえてたり不安だったりしてたようです。しかし人を傷つけることは自分も傷つける両刃の剣ですからね」

横内さんの著書『夢みる力は眠らない』によれば、今となつてはこれも大切な通過儀礼だった、と思えるそうだ。振り回され続け、何度もキレて、やめると言いかけてやめなかったのは、仲間たちにこの大仕事を自慢していたからで、決裂となれば負けたと思われるのが悔しかったから、というのはわかる気がする。

河合は命がけの仕事のために常に狂気の領域に入り込んでいなければならず、命がけで人にぶつかり続けた結果、ついに心身がボロボロになり、この芝居の二年後、ある女優の部屋で自殺する。

「あのころ打合せではぼくはいつでも河合さんを睨みつけてたし、向うもぼくを睨み返し

てました。命がけという言葉をよく口に出してましたけど、そもそも命がけで取り組んだことに對する對等の評価が得られるなんて、ありつこない。ぼくは河合さんから、生きていくことの厳しさと誇りを、創り続けていくことの責任と覚悟を叩き込まれたと思つて、感謝しているんです」

横内さんの率直で緊張らない語り口を聞いていて、「柳に雪折れなし」という言葉がふと思い浮んだ。柔軟で芯は強い人なのだろう。「演劇やるのはヘンな人ばかりだよ、という噂を聞いてましたけど、自分たちが始めてみたらわりと時代が變つてて、優男やさおとこでも優等生でも演劇やつていい時代が来てたんです。親を殺して出てこないと演劇はできない、とか書いてありましたけど、ぼくらの世代は違うんです。でも近ごろはあまりにも議論を戦わすことがなくなつてしまつて、ぼくらはまだしも芝居が終ると居酒屋に行こう、という感じがありますけど、二十代くらい若い劇

団は終って紅茶飲んで帰る（笑）。それですむの？　って気がします。演劇論でなぐりあいこそしなくていいけど、でもどんな稀薄になっていつて、それが芝居にも出てますよね。俺は今泣いてるぞ、とか、笑ってるぞ、とかいうのが芝居だと思う。今、泣いてるのか笑ってるのかわからない芝居を、客席の若者たちがじっと見つめて、拍手もしないで帰って、多分面白くなかったんだろうと思うと、ネットでは結構反響があったりして、ちよつと不気味ですね（笑）。別にあれほど熱くなくてもいいけど、あの熱さの切実さみたいなものは、今となれば大事なものだっと思えます」

横内さんが結婚したのは『きらら浮世伝』のすぐあとだった。

「高校演劇のときからのつきあいで、ぼくたちは神奈川代表、彼女たちの大妻女学院が東京代表でした。少女歌舞伎の『古事記物語』

みたいなのをやって、うちのオクさんは男役をみごとにこなしてました。何しろ劇団四季の人がコーチについてましたからね。でも入賞はしませんでしたけど。そのうちぼくたちが劇団を作って、とりあえず知り合いにはみんな通知を出しますよね。すると女の子たちも最初のうちは面白がつて切符を十枚くらいずつ買ってくれてたんですが、だんだん就職はどうするつもり？　おかしいんじゃない？　なんて、みんなあきれはてて離れて行ったのに、うちのオクさんだけは離れなかった。ぼくは浪人して大学入って、しかも留年して芝居やってるから、当然食べて行けません。向うはストリートで就職して、給料のいい大妻の国語の先生になりましたからね。ぼくは字が乱暴で台本書いても役者が読めない、って言ったらワープロ買ってくれたりして、結婚前からヒモでした（笑）。ちようど『きらら浮世伝』やってたとき、劇場の向いの蟹料理屋で彼女の家族と食事をして、お父さんに結

役者さんに演技指導をする横内さん。劇団扉座第20回公演「いとしの偽—100Days Love—」の稽古にて。



婚の許可をいただいたわけですよ」

結婚式の前の晩、見城氏から電話があった。「つかさんが、行くって言うてる、って。ついては主賓の挨拶は面倒だから、乾杯だな、って（笑）。もう段取りは総て決ってるのに、夜の十一時半ですよ。乾杯は高校演劇のときの校長先生でしたけど、お詫びの電話をして、それならと心よくゆずってくださいました。当時のつかさんの二度目のオクさんは評判の美少女で、うちの妻の学校の後輩なんです。だからつかさんは大妻のことをよく知っていて、校章のバッチの裏には創立者の大妻コタカ校長の座右の銘、『恥を知れ』というのが書いてある、とか、ひとしきり大妻の話をするものだから、お招きしてあった学校の先生

方がすごく喜んでました」

平成三年、『愚者には見えないラ・マンチヤの王様の裸』初演。翌年この作品が岸田戯曲賞を受賞する。

「男の生き方は、悩んでばかりいるハムレット型か、何にも悩まないで行動に走るドン・キホーテ型か、とよく言われますけど、この芝居は、ドン・キホーテになるか、裸の王様になるかじゃなくて、一人の人間の中でそれがないまぜになって、見方では裸の王様だけど、片方でアッパレよくぞここまで見通した、というのを芝居にしました。岸田戯曲賞は、ぼくが反発していたアングラ世代の選考委員がゴソツと抜けて、別役実さんや、つかさんは残って、そこに野田秀樹さんとかの若い人たちが入ってきた、その年にいただきました。まず白水社から受賞が決ったという電話があつて、すぐそのあとにつかさんから電話があつたんです。おめでとう！ って。ぼくは平身低頭するしかない。でもな、お前、

あれは別役さんが推してくれたんだ、って。別役さんは、御自身は前衛のトップランナーだけど、極めて柔軟な方で、それでオーソドックスなほくの作品も、新劇の復権だと評価してくださったそうなんです。実はつかさんも強く推してくださったんですけどね。で、つかさんが、電話、妻にかわれ、って言うんですよ。結婚式で会っただけなのに。そしてらなんだか長いこと話しこんで、気味わるいんですよ（笑）。あとで聞いたたら、どうだ、嬉しいか、って始まっていろいろ言うんだけど、別に妻はつかさんにそれほど思いがあるわけじゃないから、なにしろ大妻少女歌舞伎出身ですから。は？ みたいな感じで、このずれ方はつかさんの芝居そのものみたいで笑えましたね」（つづく）

11/28・29 厚木市文化会館・小ホール
12/1・5 新宿紀伊國屋ホール
劇団扉座第46回公演

『新浄瑠璃 朝右衛門・小池一夫「首切り朝」より』

シリーズV

法然上人を
めぐる人々

◆ 第五回 ◆

熊谷直実 の 回心

石丸晶子

挿画・鈴木奈緒

十三

「怒りが収まらないならば収まらないままでお念仏なさい。怨みが消えぬならば消えぬままで称えなさい。怒りが、怨みが、消えてからお念仏しなければならぬならば、われら凡夫は終生、お念仏を称えることなど、できません。今の心のままでお念仏すればよいのです。あとは弥陀がよくしてくださいます。大切なことは弥陀にすべてを委ねてその御本願におすがりする心、合掌する心です」

法然上人のこのおことは、直実なおみの心の底の底に落ちていった。

（—そうだったのか）

目の前に新しい世界がひらけた思いであった。

（何も窮屈に考えなくてもよかったんだ。人を殺したり、盗みを働いたりさえしなければ、後は念仏しつつ、ありのままの「生の自分」を生きていけばいいんだ。）

何か晴れ晴れと自由な心境になった思いがした。

（以後、生涯、お上人様の御後みあとにつき従って（いこう）直実は固く決心した。

こうして彼は、法然上人の弟子「法力房蓮生ほくりきほうれん」として新しい人生を生きることになったのである。

がしかし、弟子として生きることになったといっても、そこに「生の自分」として流れているのは関東の荒くれ武者の血である。端から端へゆれうごく直情径行の血も「生の自分」であった。

そのようなわけで、はじめのうち彼は尼御前が采配する草庵うしろの家屋に道遍や道蓮とともに寝泊りして、朝晩神妙に念仏を称え、通や蓮に手伝って草庵周辺の掃除をしたり、法然上人の法話にあつまる人々の世話の手伝いなどをしていたが、十日、二十日、とそうした静かな明けくれを送るうちに持ちまえの血が騒ぎだした。

そんなある日、法然上人は摂関家の兼実に
乞われて浄土の法門を説きに月の輪にある九
条家にいかれた。

招かれた先は今をときめく兼実邸である。
一番弟子の信空はお供をしたが、他の弟子た
ちは遠慮していた。

ところが新入りの直実が、

「お上人様のお供をさせていただきとうござ
います。力だけは人一倍ございますれば、道
中、万一狼藉でもありましたときはお役にた
つにちがいありません。この直実、元はと言
えば天下にその名をしられた坂東武者にござ
います」

などといいだして、結局、摂関邸にまで付
いていくことになったのである。

屋敷に着くと彼は庭先に控えた。

と、座敷のなかからは兼実の問いに答える
法然上人のお声がきこえてくる。だが庭先に
いる直実には内容が聞きとれない。

(クソッ)



十四

直実は思った。気持ちのままに、座敷の奥に向かつて聞こえよがしに、

「ああ、ああ。穢土ほど口惜くちしいところはないわい。浄土ではこんな身分差別などないものを。浄土では法然様との御談義の内容も聞こえるわい」

と大声でわめいた。

事情を知った兼実は苦笑して側らにひかえている近従に、

「その者を縁先に上げよ」と命じた。

直実は法然上人と兼実の声が聞こえる縁先に上がつてきたが、ブスツとした顔で兼実に挨拶一つしなかった。

「月の輪殿になんとまあ、呆れはてるとはこのことだ。鎌倉武士は礼儀をしらぬ。法然上人はなぜ直実を叱責されぬのか」

弟子たちは互いにいいあったが、直実は平気な顔をしていた。

その直実がある日、

「お上人様」

と法然上人の前にすすみでるといった。

感激の大泣きのなかで法然上人に帰依して三月みづきあまりが経った建久六年（1195）の夏。木立にかこまれた吉水の草庵にも蒸し暑い一日がはじまろうとしていた。

「われらがかねてより不審に思っておりますことがございます」

そういうと彼は法然上人のかたわらにひかえていた法蓮房信空と真観房感西かんさいをじろりと見た。

直実が神妙にしていたのは初めの五、六日で、法然上人の庵室のかたわらで三月みづきあまりも暮らすようになった今は、持ち前の気性から他人には横柄とも誤解される態度をとるようになっていた。

「おお、それは何でありましょう」

数珠をつまぐる手を休め、法然様は直実の

ほうにすこし身をかめるようにしてお訊ねになった。

「ここにおられる法蓮房様や真観房様が一向にお気づきでないようなのが、われらには不思議でならないのでございますが、お上人様は美作のお生まれと承っております」
怒ったような口調で直実はいった。

「いかにも、私は美作の出です」

法然上人は微笑された。(それが何か)、というお気持ちである。

すると直実は

「法蓮房様」

と今度は信空にむかい、語気をつよめて、
「お氣が付かれませぬか。美作はお上人様ご誕生の聖地でありますぞ」

大柄なからだなので、清楚な体つきの信空や感西に対しては自然と見おろすような恰好になっている。

「—それがどうしたというのだ…。法然上人様が美作のお生まれであることは、今さら新

入り弟子の法力房などに教えてもらわずともわかつておるわ」

信空も感西もいささか不愉快そうな顔で目の前の大男を見た。

と直実はじれったそうに、

「呑気な方々よ」

と法然上人の前であることも忘れたようすで舌打ちすると、今度は大声で、

「法然上人様お生まれの聖地に、われらが聞いた話では、記念する寺すらないということではありませぬか。長年おそばに仕えておきながら、お二方とも、今までご誕生の地に一字建立のお気持ちすらおありにならなかったのか」

吐き捨てるようにいったかと思うと、突然侍ことばになって

「お手前がたは先達の兄弟子なれど、あまりの呑気さにこの直実、ほとほと呆れてしまい申したわ」

とわめいた。

十五

鎌倉を出奔したときもそうであつたように、思い立ったら即行動にうつさねば気がすまぬのが直実の身上である。

「お志はうれしいが、造寺造仏にもまして尊いのは念仏です。法力房はこしばらくは吉水にいて念仏に励み、浄土の法門への帰依を深められよ」

という法然上人のおことばにも耳を貸さず、信空と感西をなじったその日のうちに、

「呑気なお手前がたのそばに呑気にしてなんぞいられるか」

と捨てゼリフをのこして彼は法然上人の生まれ故郷美作稲岡荘へと旅立っていった。

山峡の地に建つ今は無人の稲岡荘は荒れていた。

その昔、少年勢至丸が両親とともに暮らした屋敷は崩れ、雑草が生い茂り、夏の陽をあ



びたべんべん草だけが主人顔に風にそよいでいる。

雑草の中に立って直実は涙した。

（何ということか。幼少の日々、父君母君とともに法然上人様が過ごされた聖地がこのありさまとは……）

べんべん草が生い茂った屋敷跡を歩きながら、この聖地に一字建立の気遣いをしなかった兄弟子たちへの怒りがあらためてこみあげてくる。

（法蓮房も真観房も、それに善恵房証空も、そうだ安楽房も住蓮房も、みながみな都出身の者たちなのだ。しばし住人がいなくなればたちまち草生い茂って廃墟となる地方の土地をしらないのだ）

――よし、われらがお上人様ご誕生のこの聖地に、立派な一字を建立してみせるわ。

直実は武者ぶるいした。

奮い立った彼は、即座に稲岡荘の地頭の屋敷におもむくと出てきた地頭にかけあつて周

辺の農民をあつめさせた。そして彼らを指揮して草を刈り、土地をととのえ、そこにささやかではあるが持仏堂を建立。そのかたわらには

「法然上人ご誕生の寺」

という石碑を建て、その年の暮れ、都にもどって来て人びとをおどろかせた。

「法力房はよくそんなことができたものだ。しかもかかるみじかい期間に」信空もおどろいて尋ねた。

「そなたには叱責されたが、師僧のふるさとに一字建立したいという夢は真観房もわれらも早うからいだいていたのだ。だが何せあの源平争乱の騒ぎでな。都が今すこし落ち着いてからと思うておるうちに今日になってしまったのだ」

信空はいった。

すると直実は先に怒ったことも忘れたようすで、

「いやいや。お気に召さるな」

彼は大きな手を左右に振った。もともとが単純な男なのであった。

「われらは元は源氏の武士。源平先の合戦では西国に赴いて勇名を馳せた武士なれば、熊谷次郎直実の名を知らぬ西国のものどもは一人たりともおらぬのよ。これが幸いしたまでのこと。今回のことでもお手前がたを責めておるのではないわい。われらが西国で名の知られた幕府の武士であつたまでよ」と愉快そうに笑った。

直実によると、持仏堂の仏像は、稲岡莊の村長の家になかなか立派な阿弥陀如来像があつたので、

「法然上人様は都でも名高い高德の聖ぞ。お手前の家に置いておいて埃をかぶるよりも、ご誕生の地の持仏堂に安置させていただくほうが、よほどの功德になるではないか」となれば無理やりに取り上げて持仏堂に安置させたのだという。

「村長も、わが家の阿弥陀如来像が法然様ご

誕生の地の持仏堂に安置されたとなれば、日々持仏堂におまいりすることになろうて。さすれば持仏堂の管理も行き届く。一石二鳥の効果よ」

ふたたび直実は愉快そうに笑った。

直実には都育ちの弟子たちに眉をひそめさせる傍若無人の振る舞いが多かつた。

しかし、それまで誰もなしえなかつた法然上人ご誕生の地に持仏堂をつくりあげ、そこに阿弥陀如来像まで安置して村長に管理させて格別どうということもない顔で都に帰つてきた直実には、誰しも内心感嘆しないわけにはいかなかつたのである。

直実はしだいに、法然上人の弟子のなかにあつて、特異な存在として一目置かれ、認められるようになっていった。

(この項おわり)

もしそれ造像起塔を以て、本願としたまわば、貧窮困乏の類は定んで往生の望みを絶たん。然るに富貴の者は少なく、貧賤の者はなはだ多し。：然ればすなわち弥陀如来、法蔵比丘の昔、平等の慈悲に催され、普く一切を損せんが為に、造像起塔等の諸行を以て、往生の本願としたまわず、ただ称名念仏の一行を以て、その本願としたまえる。

〔選択本願念仏集〕第三章

もし仏像を造ることや仏塔を起てることを、阿弥陀さまがご自身の浄土往生の本願行として誓われたならば、貧しくて生活に困窮している人々は、必ずや浄土往生の望みを絶たねばならないだろう。とはいえ現実の世は、仏像を造り仏塔を起てることができる裕福な人々はきわめてまれであり、貧しくて生活に困窮している人々はまことに多い。：だからこそ阿弥陀さまは、法蔵菩薩であられた昔、平等の大慈悲心をおこされて、広くすべての人々を救い摂ることを目指し、仏像を造り仏塔を起てる等の諸行を浄土往生の本願行とはなさらずに、誰もが修められるお念仏一行を浄土往生の本願行として定められたのです。

平等の慈悲——一人も捨てず——

今年の夏も学生・保護者五〇名を引率し、大学主催の行事である古都仏教文化研修のため二泊三日で京都を訪れました。今年で六回目を数え、キャンセル待ちが出る程の人気の研修です。今年の行程は、次の通りです。

初日午後 洛北三尾方面 ①梅尾・高山寺（世界遺産）、

②槇尾・西明寺、③高雄（高尾）・神護寺、

夜 講義 仏教建築について——平等院鳳凰堂——

二日目午前 伏見方面 ④醍醐寺（世界遺産）、⑤日野薬師・法界寺

午後 宇治方面 ⑥西国観音霊場・三室戸寺、

⑦宇治上神社（世界遺産）、⑧平等院（世界遺産）

夜 講義 仏教絵画について——仏画を読む——

三日目午前 京都東山 ⑨真言宗智山派総本山・智積院、

⑩天台三門跡・妙法院、⑪三十三間堂、⑫東寺（世界遺産）

今回参拝した十二の寺社の内、四ヶ寺一社が世界遺産に登録されており、ほとんどの寺社で国宝を多数蔵しており、重要文化財に至っては数え切れないほどの什物が伝来されています。というのも、多くの寺社が平安初期か、それ以前に開創され、千二百有余年もの風雪に耐え、星霜を重ね、長い歴史を刻んで

きたからです。現在まで大切に守り続けて下さった歴代のご住職方と多くの僧侶、そして、それぞれの寺社を支え続けてきた数え切れない方々のご努力に心から感謝を捧げ、そのご精進には感嘆の念を禁じ得ません。

私自身は、すでに何度も訪れている寺社がほとんどですが、すべての寺社で訪れる度に新たな発見があり、ご本尊をはじめとする仏・菩薩・明王・天部の諸像から多くのことを学び、手を合わせてご尊顔を拝すると、そのお顔に微笑みかけられ、声を掛けられているかのような優しさに包まれ、深い感銘を与られます。各寺院で僧侶による丁寧な案内や接待をいただき、はじめて訪れる寺社の多かった学生や保護者の方々もいたく感動し、学生・保護者一同、大いに満喫した研修でした。気が早い話ですが、早速、来年の行程を頭の中で練り始めています。

ところで、こうした寺社が開創された後、百年、二百年、三百年ほど経過した頃に生を享けた方こそ法然上人です。その当時は、天皇をはじめとする皇族・貴族の力が強く、新興勢力としての武家の力も大きくなっていました。そして、皇族・貴族、武家に支えられ、あるいは、経済基盤として多くの莊園を有していたのが寺社勢力でした。大きな寺院の中には、皇族や貴族の子女が歴

代の住職を務める門跡寺院もありました。それら皇族・貴族、武家、有力な寺社が互いに牽制し、互いに支え合って日本を動かしていたのです。そして、大寺院の多くが、その権勢と財力を背景に多くの仏像を造り、塔堂などの伽藍を整備していったのです。もちろん、皇族・貴族、武家の方々が仏像や堂塔を次々と寄進したのは、自身の権勢を誇示するという側面があったことも否めませんが、こうした善根功德を積むことによって、あるいは自身が仏となることを目指し、あるいは浄土に往生することを願っていたからに他なりません。そうした仏道実践を奨励し、人々に促すことが当時の仏教界の常識だったのです。もちろん、私たちのような一般庶民が、大寺院の伽藍を詣で、本尊のお顔を間近で拝することなど皆無に等しかったでしょうし、ましてや、自身が仏となり、あるいは、浄土往生を遂げることなど夢想だにできなかったでありましょう。そんな仏教界の常識を根底から覆されたのが法然上人でした。冒頭の『選択集』の一節を通じて上人は、誰もが修められるお念仏こそ阿弥陀さまが浄土往生のための唯一の本願行として誓われたことを明らかにされたのです。権勢を誇る一握りの人々の仏教から誰もが救われる仏教への大転換でした。大寺院を訪れる度に改めてそうした思いも噛みしめている昨今です。合掌

(林田康順)

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第十八回

足立文太郎と娘婿
井上靖 その2



生涯のテーマ「仏教と西域」

につながる海旭の存在

ワインセラーに隠された秘密の解剖室から出て、荘重な大学本部の前にたたずんだ井上靖は、ストラスブールのシンボルであるノートルダム寺院の尖塔をはるか南西の方角に望みながら、胸の深奥で呟いた。

——百年前、この地にとともに留学した岳父・足立文太郎と岳父に死体贈呈を誓った無二の友・渡辺海旭との交遊について、描くのはいささか早すぎたのかもしれない。

一九五〇（昭和二五）年、苦節十有余年、四十路をとうに超えてからやっと芥川賞をもらって、まずは自分をはげまし続けてくれてこの日を見ずに逝ってしまった岳父に報いなければと、二人のエピソード入りの小説「シヤクナゲの花」を大慌てに慌てて書き上げたことが、今になっては、悔やまれてならなかった。

あのころは、とにかく物書きとして名を上げた一心で、歴史物や私小説風生い立ちの記のようなものばかりを書いていた。乞われるままに随筆や雑文もかきちらした。そうそう東京オリンピックを次回に控えたローマオリンピックの観戦記を依頼され、「ご褒美」として、現地取材の後にヨーロッパ各地を回らせてもらったが、岳父と海旭の出会いの地である、ここストラスブールに立ち寄ることはなかった。

あれは、芥川賞受賞からちょうど十年たった一九六〇年（昭和三五）、井上の代表作ともいえる「天平の甕」につづいて「敦煌」を世に問うて、「仏教と西域」という生涯のテーマがしっかりと自身の中で結実、国民作家としての地歩をかためることができた時期だった。あのとき、取材のついでにストラスブールへ来て、この解剖室を見ていれば、岳父と海旭への理解はより深いものになっていたことだろう。そして、以前、「シヤクナゲの

花」に挿入した岳父と海旭の交遊エピソードに不足を覚えて、書き改めようとしたかもしれない。いや、「天平の甍」や「敦煌」ともテーマ的につながるまったく別の大作に仕立てられていたかもしれない。

あのときストラスブルに寄ろうともせず、海旭を仏教伝来と西域という文脈の中で評価できなかったのはなぜだろうか、と井上は反芻（はく）をした。

おそらく、「シャクナゲの花」を捧げたことで岳父への恩返しをすませたという気持があり、それが井上の生涯テーマともつながるはずの仏教者・渡辺海旭という存在を失念させたのではなからうか。

今思えば、海旭のエートスとパトスは、千年前の「天平の甍」の主人公・普照とも、「敦煌」で経典を業火から守ろうとした主人公の趙行徳とも同根ではないか。

ストラスブルは 千年後の長安!?

井上は、かつて岳父から聞かされた海旭の話を久方ぶりに思い出していた。

岳父から海旭の死体贈与のエピソードを聞かされたときは、強い好奇心をいだいて、海旭についてもあれこれ岳父に訊ねたりもした。留学時代はもちろん、帰国後の交流についても。帰国後も二人は交流をつづけ、海旭が京都の足立の自宅へ訪れ久闊を叙すのを、幼少時代の妻もなんだかみかけ、ことばも交わしたらしい。海旭は見かけとはちがって気さくな人柄だったという。

井上は「シャクナゲの花」を書くにあたって、海旭について、岳父の話に加えて資料にもあたって情報を収集した。それによると、渡辺海旭は、一九〇一年（明治三三）、第一期浄土宗海外留学生に選ばれて、当時はドイツ領だったストラスブルへ留学。当地はイ

ンドから四散した仏教の經典を数多く集積した西欧における仏教研究の拠点で、海旭は仏教學の泰斗のロイマン博士に師事。まずはサンスクリット語、チベット語、パーリ語を学んでそれぞれの言語による仏教原典にあたって比較宗教学を修め、帰国してからは明治の近代化のなかで伝統仏教の再生・再興に大いなる貢献を果たした。

「天平の薨」では、当時の先進文明国・唐から最先端新思想である仏教を日本に持ち込んで、新しい国づくりの精神的礎にしようとした若き留学僧たちを描いたが、改めて考えてみると、ストラスブールはいわば千年後の長安であり、渡辺海旭は千年後の留学僧ではないか。

そして「敦煌」である。九百年前に亡びたといわれるシルクロードの幻の都市。その消滅の悲劇のなかで焼失する運命にあった万巻の仏典を守った男・趙行徳の物語を描いたが、これは一九〇七年（明治四〇）にイギリスの

探検家スタインによって敦煌の遺跡が確認され、貴重な絵画や仏典を持ち帰った歴史的事件に着想を得たものだった。そのとき海旭はまさに留学中で、当時世界を驚嘆させたビザンティウスに胸を高鳴らせ、文献の一部を閲覧したいと切望したはずである。翌一九〇八年五月ロンドンで開催された世界仏教会議に海旭も出席しているので、ひょっとしたら目的を果たせたかもしれない……。

そんな想像が次から次へと井上の脳裏にうかんできた。と同時に、こうも思っただけで悔やんだ。芥川賞受賞直後はわりだったとしても、せめて仏教と西域が生涯のテーマだと確信をいだいたときに、海旭の存在を岳父とのやりとりの中から引き出していれば、「敦煌」にもつながる物語が描けたかもしれない。しかし、気がつくのがあまりにも遅すぎた。癌という死の病と折り合いをつけながら五年、書きたくても、もう自分にはその氣力と体力は残されていないかもしれないという諦めがわ

いてきて、井上はかぶりを振って深い嘆息をついた。

観劇とうなぎの蒲焼

やがて井上たち一行は大学を離れると、車で市の中心へと向かった。近づくにつれてますます高くなる大聖堂の尖塔を見上げながら、井上は、百年前、岳父・足立文太郎と渡辺海旭はこの異国・異教の地でどんな交わりをしたのだろうか、想いを巡らせた。

モダンなデザインの路面電車と何度となくすれ違った。岳父から聞かされた話を思い出し、これが当時は馬に牽かれていて、岳父も海旭もこれで市内を往来したのか、と百年の歳月を思った。

岳父によれば、留学した当時はヨーロッパ初の蒸気機関車による路面走行車両で、覇者ドイツ帝国の国威を示すシンボルだったらしいが、市内だけは馬に牽引されていたと聞かされて、近代と前近代のアンビバレンツな同

居を奇異に感じたものだった。

と、マロニエの並木を「誘導路」にしたがえた重厚な建物が見えてきた。運転手によるとオペラ座だという。ここか、岳父と海旭が立ち見を楽しんだのはと、井上は傍らの妻ふみを見ながらつぶやいた。

研究一途の岳父だったが、唯一の趣味といえるのは酒と芝居見物だった。酒は留学以前から嗜^{たぐ}んでいたが、観劇は留学時代に身に着けたものだ。妻によれば、岳父はオペラの立ち見に良く出かけたらしい。好きなものは何回でも見たらしく、所作や台詞までよく覚えていて、酒が入って上機嫌になると子供たちに演じてみせたという。

おそらく下宿の同居人であった海旭もつき合わされたのではないか。いや、逆だったかもしれない。そうそう、海旭が釈迦の「悟りの日」に留学生仲間とビールジョッキで祝杯を上げ、オペラ観劇に繰り出すというエピソードもあったというから、海旭と岳父とは誘

ったり誘われたりだったのかもしれない。

車は運河をなんども超えた。ストラスブールはライン川の支流イル川の中州につくられた古都で、運河に囲繞され大小の船舶が頻繁に往来している。岳父も海旭と一緒に舟遊びに興じたかもしれないと想像しながら運河に目をこらすと、釣り糸を垂らしている人をもとめて、井上はおもわず傍らの妻につぶやいていた。「足立のお父さんは、ここのうなぎを釣ったのだろうか」

妻ふみから幼少時代の岳父の思い出をよく聞かされたが、そのなかでもっとも印象深い話のひとつが「うなぎ事件」だった。岳父は、望郷の思いからか、川でうなぎを釣って料理。下宿の女主人を大いに困惑させたが、女主人は岳父に勧められるままに渋々味見をさせられるうちに、次第に味になじんで、父にうなぎを釣りにいくように勧めるまでになったというのだ。

ところでうなぎはどう料理したのか。冷製

だろうか。冷製だったらご当地風なのでそれほど下宿の女将を困惑させることもない。日本人ならやはり蒲焼だろう。だったらタレはどうしたのか。炭やウチワは何を代用したのか。サンショは……とついつい想像をたくましくして井上はにんまりとした。もちろん下宿の同居人だった海旭も一緒だったにちがいない。

それにしても世界的解剖学者の卵と世界的仏教哲学者の卵が、遠いラインの支流でうなぎを釣り、さばき、蒲焼に仕上げるというのは、なんとも文学者のイマジネーションを喚起させる「虚構的光景」だった。

よく学びよく遊んだ

明治の知識人

ここまで岳父と海旭の交遊にあれこれ想像をめぐらせて、井上はふと思った。どちらも決して社交的ではない二人が、なぜ肝胆照らすようになったのか、それは二人の「作風」

が似ていたからではないか、と。

たしかに比べれば比べるほどにふたりは実に良く似ている。もつとも似ているのは強烈なまでの使命感である。

岳父・足立文太郎は三年間の約束で留学したが、その程度の月日では何もまとまった研究はできないと、政府の帰国命令を一方的に無視、ドイツのストラスブルク大学からオランダのライデン大学へ移るのだが、そのとき「お国のためにあえてお国の命令に背く」という使命感をわがことのように愛でた親友の海旭が「餞別」として贈ったのが「死体贈呈の誓約書」であった。結局岳父は四年目から家族とも音信不通状態で、五年間異国に留まり、その間に、井上も大学で見せてもらったように多くの論文を発表、今なお日本以外では、志賀潔や北里柴三郎や野口英世とならぶ「極東からやってきた医学の偉人」としてその名を残したのだった。

そんな勉学三昧ゆえに岳父は無一文に近い

状態で帰国。妻のふみによれば、家族への土産はスイスで買い求めたという牛の首に付ける鈴（カウベル）であった。それはいま妻のふみと共に井上の自宅にあり、井上と妻は、今回の岳父留学地行きにあたって、それをひと鳴らしして日本を出てきたのだった。

かたや渡辺海旭も使命感では負けてはいない。岳父より六年も長い十一年間も研鑽をかさね、ドクター・オブ・フィロソフィー（哲学博士号）を授与されてからは、ヨーロッパ各地の大学で仏教哲学やインド学を教授。帰国後は、日本にある漢訳経典をすべて調査校合した大正新脩大藏經全八五巻の監修、労働者共済事業や禁酒禁煙運動の提唱・実践、芝中学校長、東洋大学学長など教育への献身など、仏教者として日本の近代化に大いなる貢献を果たした。海旭は、「生涯不犯」を貫いたが、それは新戒律主義という仏教者の生き方もあったろうが、これだけ大車輪の活動をやりとげるためには、家庭生活にさく時

間がないという思いもあったからではないか。

使命感は「死に方」にもつらぬかれていた。

岳父の足立文太郎は、死の当日まで仕事をしていた。朝、書齋で資料にあたっていると、「あつ、きた」といってそのまま帰らぬ人となった。医者だけに脳卒中に襲われたことを自覚してのつぶやきだったと思われる。

いっぽうの海旭は、昭和七年暮れの二十七日から流行性感冒にかかって床に伏していたが、年が改まった元日、二十二年間一度も新正の式を休んだことはないと思える。身をこめて、校長をつとめる芝中学の新正の式に列し、途中で倒れてそのまま不帰の人となった。

どちらも甲乙つけがたい強烈な使命感の背景には、日本の近代の夜明けを担う知識人の気概があったと思われる。

それにしても井上にとつて感動的なのは、これほど人智を超えた使命感を背負いながら、

それを苦行と受けとめるどころか、楽しんでる風情があることだった。オペラの立ち見もうなぎの蒲焼もそうだが、もっともシンボリックなのはやはり死体贈呈の盟約だ。これを岳父から聞かされたとき一番印象に残った最後のくだりを、井上は今一度思い出して、深くうなずいた。

「予は予が死後屍体の贈致と共に若干の金円を之に添付せんとす。少くとも石鹼一箇手巾一枚入浴費及醇良の酒三四合の代金を添付せんことを期す。執刀事に従せんし後入浴一番少く陶然たるの快あらんことを欲すれば也」

自分の死体を贈呈するだけでなく、石鹼と手拭いと酒代として若干の金銭を添付したい、その目的は、わが死体を解剖した後、風呂に入つて酒の三、四合も呑んでほっと一息ついてほしいからだというのだ。

いやはや明治の男どもはすごいと思うと同

古き伝統技

三代にわたる信頼

時に、どこかうらやましかった。国を背負って勉強にはげみながらも、よく遊び、そして盟約を結びながらも、こんな洒落をきかすとは、スケールの大きさを改めて思った。明治という時代が彼らをつくったのか。それとも彼らのような大きな器が明治という時代精神をつくったのか。彼らが精一杯喜怒哀楽をも

有限
会社

浄土宗法衣専門

古島法衣店

〒111 東京都台東区三ツ浅草4の2の1
電話 (03) 3842-1128 9
振替 0018002145231

つて生きた明治という時代に嫉妬さえ覚えた。それに比べると、わが岳父・足立文太郎と渡辺海旭が生きたときから百年近くたった今はどうだろう。高度成長にうかれ後に昭和元祿といわれるこの時代が、井上には、なんともぬるく、危うく、つまらなく感じるのだった。

(この項おわり)



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウォッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

●風

〔特選〕 薰風や魚籠にしたたる潮雫

河合富美枝

陸釣りと舟釣りによって、魚籠の中のもの
は当然違うのだが、このあたりは読み手に任
されている。「潮雫」は、その釣果の満足す
るに足ることを示していると見てよいだろ
う。頬をなでてゆく風が心地よい。

〔佳作〕 朝焼けや風呂一面のガラス窓

遠藤美佐子

夕顔やゆるりと風の通り道

戸井田信司

半島の沖は黒潮鰭東風

浜口 佳春

●紋

〔特選〕 葵の紋佐渡の金山穴だらけ

中村 洋子

佐渡の金山は幕府の直轄で、国最大の産出
を誇った。葵の紋はそれを示すものだろう。
また島は流刑地として通っていたから、双方

は当然結びつけられるだろう。「穴だらけ」
は彼等の労働の激しさを伝えている。

〈佳作〉

宗紋の真つ白き幡秋の風

新島 朱音

風紋を一気に流す大夕立

石原 新

提灯の家紋くつきり盆の寺

増田 信子

●自由題

〈特選〉
埋もれし廃船洗う夜光虫

齊藤 幸雄

捨てられたまま朽ちていく舟である。次第
に砂に埋もれながら、波に洗われている。夜
になると夜光虫が波に乗って、きらきらと舟
を取り巻くのである。昼の廃船と、夜光虫の
きらめく様子との対比が見られる。

〈佳作〉

立葵ちらちら遠き浄土の灯

中島富士子

水一杯飲みて始まる田草取り

さとうゆう

問わるるも問うも大声淹しぶき

寺下 忠至

誌上句会〈編集部選〉

■風

風鐸の音にゴロ寝の夏座敷
篠竹の秀のさわさわと海の風
大西日風土記の丘の大樹かな
なお風化してゆくタオル朝雲
街いなく風吹きわたる青田道
夕焼けの港に届く手風琴
じゅうたんを取りし部屋なり夏の風

■紋

紋入りの菓子に一礼盆の客
虫干や祖母の匂いの江戸小紋

家紋入りの提灯夫の初盆に
紋服でかしまりたる夏の蝶
紋章の刻まれている処暑の門
紋白蝶眩しいほどに白き夏
紋付の清楚な単衣被露宴

■自由題

子雀のころげ落ちたる梅雨晴れ間
弥陀の手に五色の糸や青時雨
灼け深き骨董市の招き猫
蓮の葉の下にたつぷり暗い水
来るひとへそつと団扇の風送る
玉葱の明るさを売る青物屋
蓮の葉の重なる下の蓮の花
銀匙の冷たき水イチゴかな
不揃いが自慢でありし鉢トマト
葉の蔭にとげ柔らかき胡瓜垂れ
歳時記に頼る草の名夏は来ぬ

中島富士子
園田亜由美
雨宮敦子
進藤美佐子
井村善也

佐藤雅子
河合富美枝
斉田 仁
西原規夫
小林暢夫
小林苑を
山内桃児
工藤 掉
東 保
吉崎美和子
池田伊吹

浄土誌上句会のお知らせ

兼題

小鳥

葡萄

自由題

締切・二〇一〇年十月二十日

発表・『浄土』二〇一〇年十二月号

選者・増田河郎子（『南風』主宰）

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係



かまちよしろう先生作新聞四コマ漫画「ゴンちゃん」が各地方新聞に掲載されています。(静岡新聞・山梨日々新聞・北日本新聞・福島民報・宮崎日々新聞・新日本海新聞・山形新聞・長崎新聞・岐阜新聞・以上朝刊。中国新聞・神戸新聞、以上夕刊)



秋思添ふ無縁家族の哀れかな

岱潤

九月初め、東京板橋区の病院で多剤耐性菌の院内感染によって、九人の患者さんが亡くなったというニュースが飛び込んできた。当初この病院の問題と思われたこの問題は、あつという間に全国に波及し、インドからの帰国者からはもっと強い菌さえ検出された。

この問題には、いつもの院内感染の問題とかたづけられない、壮大な人類と細菌との戦いの歴史が刻まれていた。

多剤耐性の細菌とは、現存の抗生物質がまったく効かない細菌のことで、現代の医療ではお手上げということだ。

科学と細菌は、正に戦いの歴史を繰り返してきた。ペニシリンの開発から始まったこの戦いは、細菌はそれに対抗するより強い菌となり、さらにそれを抑える抗生物質を作れば、細菌はさらにそれを上回るものとなる。そのスピードは開発のスピードがかなわないという。そしてそれはインドなど、医料の安い、抗生物質が大量に出回っている地域で、より菌の強さが加速度的に増しているという。「科学と自然のいたちごっこ」。そんな言葉が浮かんだとき、「自然との共生」という言葉がむなしく感じられた。けんかをすればするほど相手は強くなる。そんな言葉でこの細菌との戦いを言えば誠

雑誌『浄土』
特別・維持・賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・順成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
北山大超(焼津・光心寺)
加藤亮哉(五反田・専修寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(芝・天光院)
脳博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山・光明寺)
山田和雄(諏訪・貞松院)
(敬称略・五十音順)

に不遜だが、共生という言葉の裏にあるジレンマに、苦しまなくてはならないだろう。だからこそ法然上人は死と向き合ったのだと思えてきた。死はやはり身近な問題なのだ。
(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤晃道

佐山哲郎

青木照憲

村田洋一

浄土

七十六巻十月号 頒価六百元
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十二年九月二十日

発行 平成二十二年十月一日

発行人 佐藤良純

編集人 大室了皓

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四・七 四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三三・五七八・六九四七

FAX 〇三三・五七八・七〇三六

振替 〇〇一八〇・八・八二二七

ホームページ <http://jodo.ne.jp>

しん ねっ しよう じよう
心 悦 清 淨

よろこ
心 悦 び、 清 淨 に し て
無量寿経

生野善應

亜細亜大学講師
東京高輪・光福寺住職

人は感動すると、心が光源となつて
全てを温かく、澄み切つた見方をする。

燃えるような東福寺の錦秋の紅葉、いくつもの
水の流れがスクリーンのような袋田滝。鮮やかな
光景が目に入ると、思わず「美しい、奇麗だ」と
感動いたします。

錦秋の紅葉、水のスクリーンの滝に感動するの
は、ありのままの自然を、無垢の心の部分で捉え
て増幅しているからです。

乳を与える母親、老人たちの眼を輝かせる中学

生の手品や歌声。人々はこうした光景に感動し、
「美しい、すてきた」と、ほのぼのとした気持ち
になります。感動はなぜ人を気持ちよくするので
しょう。中学生や母親の、老人や乳児への人間ら
しい自然な対応を、人々が自分の無垢の心の部分
に映しとつた結果、ほのぼのとした気持ちになる
からです。

法然上人鑽仰会の本

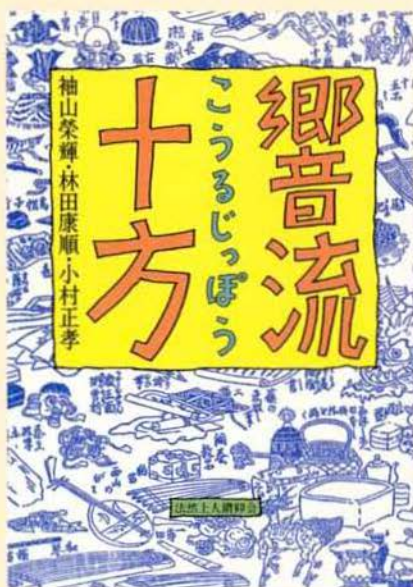
当会発行の書籍、雑誌
のお求めは、当会へ直接
お申し込みください。

なお、月刊『浄土』を除き送料は
含まれておりません。別途実費を
申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話／03-3578-6947

FAX／03-3578-7036



響流十方こうるじっぽう

600円(税別)

「差出人は法然さん」

600円



月刊『浄土』
バックナンバー



「念佛讀本」完全復刻版

1,600円

※額装寸法 47×59cm



選擇集十六章之図(額入り)

「選擇集絵解き物語」含む

20,000円(別途梱抱料300円)



「法然上人絵伝絵葉書」

(8枚セット)500円



※浄土宗大本山増上寺蔵
「法然上人絵伝・残欠二巻本」より